**心身問題と魂の死後存続―─ベルクソンの哲学的思索を手引きにして**

**棚次 正和（京都府立医科大学）**

**1　「心身問題」が含む問題**

**1-1 心身分離と心身統合、心身の根底にあるもの**

　　心身問題の変容、心身問題から心脳問題へ

　　hard problemとeasy problem

　　脳神経外科医アレグザンダーの臨死体験

　　二分法の前提──二の一（心身合一）か、一の二（身心一如）か

心身分離説と心身統合説

　　心身二元論の理論的不備──心身合一の根拠が不明。心身相関が成り立つ根拠が不明。心身関係全体が自己超越や自己実現へ向かう方向性が不明。

　　心身論の図示

■一元論

M1　 M2 　　　　　　　　 M1　 M2 　　　　　　　M1　 M2

B1  B2 B1  B2 　　　　　　　B1  B2

【唯心論・観念論】 　【唯物論】　　　　　【思考可能な二元論】

■二元論

M1　 M2 　　　　　　　　 M1　 M2 　　　　　　　M1　 M2

B1  B2 B1  B2 　　　　　　　B1  B2

【心身二元論(相互作用)】　　【心身平行論】 【随伴現象論】

■三元論

　　　　　　　　　 S

　 S

　　　　　　　M1　 　 M2

M

B1  B2

B

1-2 用語の混乱

　　霊、霊性、霊魂、魂、心、心霊、心魂、心性、心理、精神など

　　spirit-soul, esprit-âme, Geist-Seele, ＋ mind, heart (coeur, Herz)

「身体」概念も同様に混乱しているはず。用語の混乱は、認識の混乱に他ならない。

二元論　　2A 2B 2C 2D 2E 2F 2G　　 2H

(spirit)

mind

body

|  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | | | | 心 | 魂 | 精神 | 霊魂 |
| 心 | 魂 | 精神 | 霊魂 |
| 身(体) | 身(体) | 身体 | 身体 | 身(体) | 身(体) | 身体 | 身体 |

三元論 　 3I 3J 3K 3L 3M

霊　（不生不滅の実在）

　 魂　（生滅する現象）

（生滅する現象）

spirit

mind

body

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 魂 | 霊(性) | 霊(性) | 精神 | 霊(性) |
| 心 | 魂 | 心 | 心 | 精神 |
| 身(体) | 身(体) | 身(体) | 身体 | 身体 |

**2　ベルクソン哲学の帰趨するところ──魂の死後存続、身体からの魂の独立**

　　ジャック・シュヴァリエ『ベルクソンとの対話』(*Entretiens avec Bergson*, 1959)

個人の死後存続に関する三つの証拠──「第一は、現世において彼岸に参与していると感ずる神秘家の経験、これはけっして彼岸を排除するものではありません。第二は意識、つまり、この世において、すでに、身体的器官としての大脳から無限に溢れている魂。これは『物質と記憶』の論拠です。最後に、第三に、心霊科学は、肉体的な目で見える機構によって、死後存続の低位部分のなにものかを知覚させてくれます。これは、おそらく死後存続ではないでしょうが、このような証言は、現代の人間にとって重みをもつ唯一のものと思われます」(訳181)。1932年4月3日

魂の死後存続( survivance de l’âme)

**2-1 神秘家の神秘的経験**

　『道徳と宗教の二つの源泉』(*Les deux sources de la morale et de la religion*, 1932)

ベルクソンは、経験と推論以外の真理の出所を認めないが、神秘家の非日常的経験の哲学的価値を問うことを余儀なくされる。→ 哲学的思惟と神秘的経験との相互補足の必要性を説き、神秘家の証言を哲学的思惟の補助線として利用すべきと主張する。

事実の線分(lignes de faits)と交会測量法(méthode de recoupement)の比喩。

一方で神秘的経験は通常の経験を超えた実在の深みを哲学に提供し、他方で哲学は思惟の客観性を神秘的経験に投げ返すということを考えている。

「経験的な形而上学」の樹立に向けて。

　神秘的経験とは如何なる経験か？　神秘家の宗教的文化的背景は多種多様であっても、彼らの証言は驚くほど内面的に類似していること。

　ベルクソンが考える神秘主義と神秘家は、どのようなものか？──真の神秘主義について、「それの位置は、物質中を貫いて放出された精神の本流が、おそらく達しようと望みながら現実には到達できなかった地点にある(il se situe, d’après ce qui précède, en un point jusqu’où le courant spirituel lancé à travers la matière aurait probablement voulu, jusqu’où il n’a pu aller.) 」(DS.226)。

「偉大な神秘家とは人間種の物質性のゆえに指定された様々な制限を乗り越え、神の働きを続け、かくしてそれをさらに先へ伸ばしてゆくような個性だろう(Le grand mystique serait une individualité qui franchirait les limites assignées à l’espèce par sa matérialité, qui continuerait et prolongerait ainsi l’action divine.)」(DS.233)。

「唯一の個体から成る新しい種の創造 (la création d’une espèce nouvelle composée d’un individu unique)」(DS.97)

「それ[完全な神秘主義(un mysticisme complet) ]は行為であり、創造であり、愛であろう(Celui-ci serait action, création, amour.)」(DS.238)。

古代ギリシアの神秘主義（脱我や観照に止まり、行動へと展開せず）、古代インド（慈悲を薦めながらも熱が欠けた）。完全な神秘主義をキリスト教、特にカトリックに見る。たとえば、聖フランシスコ、聖テレジア、十字架の聖ヨハネら、ベルクソン在世当時ではイエスのマリア修道院長、ラザレ派僧院のプージェ師ら。

行動的神秘主義(mysticisme agissant)、「生の躍動(élan vital)」が「愛の躍動élan d’amour」」へと転調・進化（深化）。

「行為(action)」→　観照との二元的対立が止揚されて、観照的行為へ変容。

　　　「行動するために見る」⇒「見るために見る」⇒「見るために行動する」

「創造(création)」→　宇宙進化論的な視野の拡がりの中で創造主と被造物の関係を見る。

　　　創造とは「創造する者たちを創造し、神の愛を受けるに値する存在を仲間とし給う神の御業」（DS.270）。

「愛(amour)」　→　愛は神の属性の一つなのではなく、神それ自身である。神は「愛であり、愛の対象である」 (DS.267)。創造原理と愛（ペルソナ）の原理が結びつく。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〔超越者の非人格性と人格性〕

情動(émotion)──芸術や科学等の偉大な創造の起源には必ず新たな情動がある。

　改めて問う、神秘的経験とは何か。神の経験、絶対との統一の経験、言い換えれば永遠の生命を自覚・再認する経験に他ならない。死との連関で言えば、不死性の経験である。

⇒「心身問題」の探究は、神秘的経験を哲学的思惟の補助線とすることで、「魂の死後存続」の可能性、むしろ蓋然性を考えうる地平へと出ることになる。

**2-2　哲学的思索の帰結**

著書『物質と記憶』(*Matière et mémoire*, 1896), 著書『精神的エネルギー』(*L’énergie spirituelle,* 1919年)に収録された論文「脳と思考──一つの哲学的錯覚」(Le cerveau et la pensée, 1904年)と論文「心と身体」(L’âme et le corps, 1912年）を参照。

『物質と記憶』では、心身問題が精神と物質の接合点である記憶力、とくに言葉の聴覚的記憶力の問題として論究されている。その著作を貫くのはイマージュ一元論である。存在するものは一切イマージュであり、それは観念論者が表象と呼ぶもの以上だが、実在論者が事物と呼ぶもの以下である。全てのイマージュは、自然法則に従って常に互いに作用を受けただけ反作用を返し合っており、宇宙の全現象の相互作用は、イマージュの相互作用と見なされる。ところが、諸々のイマージュが相互に受け取った作用を必然的な仕方で返し合っているイマージュの総体（つまり宇宙）において、受け取った作用の返し方をある程度選択しているように見える特殊なイマージュがある。それが「私の身体(mon corps)」である。その知覚の開け、すなわち「私の身体を取り巻く諸対象は、それらに対する私の身体の可能的行動(l’action possible de mon corps)を反射している」(MM.16,訳23)。こうして、「物質」（イマージュの総体）とそれが特殊なイマージュ（私の身体）に関係づけられた「物質の知覚」の二系列が定立される。科学(science)と意識(conscience)の二系列。

次いで、ベルクソンは記憶力をひとまず括弧に入れ、「純粋知覚(perception pure)」の仮説を提出する。それは「現在の内に没入してあらゆる形の下での記憶力を除去し、物質について直接的かつ瞬間的直観を獲得し得るような知覚」(MM.31, 訳39)であり、「物質」と「物質の知覚」の隔たりは、現存(la présence)と表象(la représence)の隔たりであって、イマージュの表象はその現存よりも少ない。この「純粋知覚」の分析を通して、ベルクソンは以下の二つの結論に導かれる。一つは、脳はただ行動の道具であり、表象を生み出す道具ではないという、知覚における脳の役割についてであり、もう一つは、純粋知覚において我々は外的事物の実在性に触れているということである。ただ、これらの結論は直接的な検証を許すものではないため、検証可能な「記憶力(mémoire)」の問題が取り上げられる。

イマージュの保存と再認には、それぞれ二種類の形式が存在する。イマージュの保存に関しては、「習得された記憶」（過去を身体の運動機構の中に定着する）と「自発的記憶」（一切の出来事を細大漏らさず記憶イマージュの形で記録する）が区別され、イマージュの再認についても、「自動的再認」（記憶の介入をまたずに身体だけで行なう再認）と「注意的再認」（過去の記憶イマージュを現在の知覚的運動の中で把握し直す再認）に分けられる。このことは、再認の疾患においても、知覚と随伴運動の絆の破壊と、過去のイマージュの喚起不能という二種類があるということを意味する。つまり、「自動的注意の感覚運動機構」が冒される場合と、「有意的注意の表象機構」が冒される場合があるのである。しかし、いずれにせよ、知覚されたイマージュは全て細大漏らさず「純粋記憶(souvenir pur)」として保存されている。それは物質の一部をなす「純粋知覚」の対極に位置する精神の内奥に潜む一種の実体的基盤──不壊の過去は現在の内に絶えず伸長される──である。この両極に挟まれて生を照らす有用な記憶が想起されて「運動図式(schème moteur)」に嵌まり込むのと同様に、感覚的知覚も「運動図式」に則って身体的運動を準備させる「生への注意(attention à la vie)」が、生物種としての人間固有の活動を根底で誘導しているのである。

このような思索の展開によってベルクソンが到達した結論は、「身体の役割は、オーケストラの指揮者が楽譜に対して行なうように精神の生(la vie de l’esprit)を演じることであり、精神の生の動的分節を強調することである。脳の機能は思惟することに存するのではなく、思惟が夢の中に没するのを妨げることに存する。脳は生への注意の器官(l’organe de l’*attention à la vie*)である」(PM.80,訳88)ということであった。

ところで、『物質と記憶』以外で心身問題をベルクソンが主題的に取り扱った論考は、少なくとも二つある。論文「脳と思考(Le cerveau et la pensée)──一つの哲学的錯覚」(1904年)では、次のような議論が展開される。「一つの脳の状態が与えられると、そこから一つの決まった心理状態が導かれる」という主張、あるいは「意識は脳の中で起こっていること以上には何も告げない」という主張は、一般に心身並行論（parallélisme）と呼ばれているが、それはデカルト哲学の中に含まれていたものを後継者たちが極端にまで押し進めた形而上学的仮説にすぎない。この心身並行論は、脳と思考の関係を説明する際に、観念論(idéalism)であれ、実在論(réalism)であれ、いずれも一方から他方へと表記方式がすり替えられるという一つの根本的な矛盾を含んでいる。観念論は対象とその変化を「表象(représentation)」として扱い、実在論は「事物・もの(chose)」として扱う。

※観念論の表記方式は、「物質の本質的なものは、その物質について私たちが持つ表象の中にすっかり展示されているか、展示されうるかであるということ、また実在するものの分節（切れ目）は私たちの表象の分節そのものである」ということである。それに対して、実在論の表記方式とは、「物質が表象とは独立に存在するということは、私たちの表象の下には捉えがたいこの表象の原因があり、現実的な知覚の背後には可能性や潜在性が隠されていると主張することであり、さらに私たちの表象に見られる区分と分節は、単に私たちの知覚の仕方と相対的であるということの肯定」である。

観念論的な説明では、外部の対象はイマージュ（心像）であり、脳もイマージュの一つであるから、心身並行論に立てば、部分は全体に等しいという矛盾した命題にならざるをえない。また当初は一つの「表象」と見られた脳と脳内の動きは、「もの」（表象の背後にある隠れた原因）として押し立てられてしまう。たとえば、追憶の場合。

他方、実在論的な説明に従えば、外部対象の表象は、脳の状態の付帯現象にすぎないか、脳の運動はただ知覚が意識される機会になるだけか、あるいは知覚と脳の運動は、そのいずれでもない一つの実在の二つの翻訳である。ところが、科学は物体の本性を「実在性」の方向に究明して行くにつれて、物体とそれに影響を及ぼすそれ以外の物体との関係（つまり相互作用）に還元しようとする。それゆえ、外部の対象が脳を変化させて表象を起こさせたとしたはずだが、脳の外部の対象を取り去っても、脳の変様が単独でそれらの表象を描く能力を持つと見なすに至る。脳が残ると見るのは、表記方式が実在論から観念論（表象の中で分離しているものを当然分離可能と考える発想）にこっそり移っているためである。要するに、「脳の状態を知覚や記憶の等価物とみなすのは、どの名でその方式が呼ばれるにせよ、いつでも、部分は全体である、と主張することになる」(ES.204訳210)のである。⇒　上述した根本的な錯誤を強化する補助的な四つの錯覚。

もう一つの論文「心と身体(L’âme et le corps)」（1912年）は、著書『物質と記憶』を部分的に要約したような論考である。心と身体の関係についての唯物論者の主張は、物理化学的現象に対する観察と実験を基に纏められた法則を意識現象にも適用することから導かれている。心の生と身体の生の間に連関があることは経験的に間違いないが、しかしそのことから「心と脳は等価的であるとか、また脳と対応する意識の働きの全てが脳の中に読み取れるなどと主張するのは行き過ぎ」( ES.36訳175)である。

過去三世紀間の哲学がこの点に関して我々に残した唯一の精緻な仮説は、心と身体の間に厳密な平行関係を認める平行論(parallélisme)であったため、心の状態は「身体が拡がりや運動の中に表現するものを、思考とか感情の言葉に翻訳することだけに限られてしまった」（ES.40訳177）。デカルト哲学はデカルト主義者によって縮められて、生理学の中に消えてしまった。ラ・メトリ、エルヴェシウス、シャルル・ボネ、カバニスのような哲学者は、19世紀の科学がもっともよく利用できたものを17世紀の形而上学から取ってきた。平行論は経験的事実ではなく、17世紀の形而上学的仮説なのである。

「もし脳のメカニズムについての知識が完全であるとしたら、そしてまた私たちの心理学が完全なものだとしたら、私たちは、或る決まった心の状態に応じて脳の中に起こることを、正確に言い当てることができましょう。しかしその反対は不可能です。なぜなら、脳の同じ状態に対応するものを、それに対応している心の様々な状態の中からただ一つ選び出さねばならないからです」。（ES.44訳180）

脳と意識の関係は、額縁とその中に入っている絵の関係に似ている。同じ額縁には多くの違った絵が入りうるのである。脳は思考を限定しない。思考の大部分は脳から独立していると見られるのである。この脳と意識の関係については、ベルクソンは、釘とそれに掛けられる服の関係、額縁とそこに入る絵の関係、舞台の演劇とパントマイムの関係、オーケストラの指揮者の棒とシンフォニーの関係など、様々な比喩で語っている。

脳は「パントマイムの器官(un organe de pantomime)」であり、脳の役割は「精神の働きをしぐさで表わし、また精神が適応しなければならない外界の状態をしぐさで表わす」（47訳183）ことである。精神の働きは脳の働きから溢れ出しているが、脳は「精神の働きの中から運動として演じられるものや具現化できるもの一切を抜き出し、かくして脳は精神が物質に嵌め込まれる場となっている、まさにそのゆえに、脳はいつも精神の環境への適応を保証し、精神にたえず現実との接触を保たしめている」（ES.47訳183）のである。つまり、「脳は正確に言って、思考の器官でも感覚や意識の器官でもない。脳は意識や感情や思考を現実の生に向かって緊張させているもの、したがって有効な行動ができるようにさせているもの」（ES.47訳184）であり、「生への注意の器官(l’organe de *l’attention à la vie*)」なのである。

記憶が脳の中に保存されないとすれば、どこに保存されるのか。「どこに」という問いは、精神について語るときに意味があるのだろうか。記憶は身体の中ではなく、精神の中にあるというべきである。我々の内面的な生の全体は、意識が最初に目覚めたときから始まったただ一つの文のようなもので、コンマはあちこちにあってもピリオドでは切られておらず、それゆえ我々の過去の全ては意識下にある、とベルクソンは考えている。意識は現われ出るのに自分の外に出る必要はなく、いつもあるのであり、ただヴェールを取り除くだけでいいのである。　⇒　「心の働きは脳の働きの外に溢れ、また脳は、意識に現われるものの中からその一部分を運動に転換させるというだけのものなら、心が死後も生き残るということは、ありうることとなり、…〔中略〕…今度は否定する人がそれを証明する義務を負うことになる」（ES.59訳193）のである。



**2-3　心霊科学からの報告**

論文「〈生きている人のまぼろし〉と〈心霊研究〉(《Fantômes de vivants》et《recherche psychique》」（1913年5月、ロンドン心霊現象研究協会での講演。論文集『精神的エネルギー』に収録）

近代科学は、観察や実験の方法によって、ただ一つの点、すなわち「計量(la mesure)」に集中させた。近代科学は、いつも理想として数学に向かっている。ここから、近代科学は、精神現象をそれと同等で計量できる現象に置き換えられないかを探究せざるをえなかった。計量に委ねられないということが精神的なものの本質に属するのだが、脳の動きを心の動きと同等であるかのように研究を進め、厳密な心身平行関係の仮説が出来上がった。

ベルクソンの哲学的研究の帰結は、脳の傷害は、記憶を呼び起こすことを不可能にしたり困難にしたりする、その想起のメカニズム(le mécanisme du rappel）だけを冒しているのであり、「脳の役割は、精神が記憶を必要とするときに、精神が身体から、探し求められた記憶に適切な枠を提供するような態度、あるいは生まれかけの運動を手に入れられるようにすること」（ES.74，訳93）である。

物質の科学の発達によって、正確さ、厳密さ、証明への配慮、単に可能的なものと確実なものとを区別する習慣を我々は身につけたのであるから、精神の科学は、その正確さを要求する習慣のお蔭で「心理的現実というほとんど未開拓の領域」に恐れることなく入っていけると講演を締め括っている。

　心霊研究（テレパシー、透視、霊界通信など）が行なわれるようになった時代的背景。唯物思想の急激な台頭（既成の宗教的世界観の否定）に対してカウンター・バランスを取る役割、およびキリスト教教義の誤謬を修正して真正の霊的意義を示す役割。

1848年3月末に米国で起きたハイズヴィル事件を契機に、スピリチュアリズム（魂の死後存続、顕幽の交流を主張）の二大潮流、すなわちイギリス系スピリチュアリズム（モーゼスは再生否定）とフランス系スピリティズム（カルデックは再生肯定）が成立する。

1882年に心霊現象研究協会（SPR）の設立。ヴィクトリア女王の治世（1837-1901年）。

※心霊研究　心霊科学　　　　 　　　 　 超心理学的研究（ESP、PKなど）

　　　　　　スピリチュアリズム（心霊主義）

**3　人性三分説（霊心身）の復権**

**3-1　人間像は首なし地蔵か？**

近年の心身論は、人間像で譬えると、まるで頭部が欠落した「首なし地蔵」のような奇怪さを漂わせている。物理主義の人間像に至っては、頭部も胸部もない下半身（腹部）像である。全き人間像は、頭部・胸部・腹部に四肢が付くのが基本形であり、その「全人」の認識は、我々の自己認識にとって決定的に重要な事柄となる。なぜなら、人間は一方で死すべき有限な心身の存在──その象徴は胸部と腹部──であると同時に、他方で不死なる無限な霊的存在──その象徴は頭部──になるからである。人間存在は、死の不可避性と不死性の両面に同時に跨がっている。こうした逆説的認識を転回点として、従来の心身関係を変容せしめるような宗教的修練や芸術的創造が実現されるのである。

**3-2　ホリスティックな人間像《全人像》を求めて**

　上述したような人間存在の不思議、つまり死の不可避性と不死性（永遠性）の両面に同時に跨がることの不思議を、どのように受け止めればいいのだろうか。我々が抱く人間像は、まだ「首なし地蔵」に近いものに違いない。「首なし」である以上、それは不死なる霊性の認識には到達していない。しかし、「地蔵」である限り、それは霊性（神性・仏性）を蔵する存在と見られるべきものである。したがって、「首なし地蔵」という表現自体が自己矛盾でありながら、しかも現代人の認識境位を適切に表わしているとも言える。たぶん求められているのは、我々自身の自己変容、身心変容である。それはひとえに、「人は死ぬ(Man is mortal.)」と「人は死なない(Man is immortal.)」という相矛盾する二つの命題を統一的に理解しうる強靱な視力をいかにして獲得するかに掛かっていると思われる。